

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【常盤北小学校】

⑥ 次年度への課題と学力向上策	
知識・技能	今後も国語においては漢字を正しく使うことを、算数においては小数の減法・除法・分数の減法の計算の定着を図れるように、単元を通して意図的な授業づくりをしていく。加えて、言語活動の充実に向け、授業の目標や内容に応じて振り返りをしっかりと文字に表して書いたり、読書タイム等活字に触れる機会を増やしたりする。問題解決の課程や解答に至る理由を言葉で説明したり、児童同士で自分の考えや意見を交換する機会を増やしたりする言語活動を継続的に設定していきたい。
思考・判断・表現	今後も自分の考えをもち、他者との意見を比較検討する活動を、児童の実態を見極めながら継続して行っていく。授業において、話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりすることができるように、各教科等の授業では根拠資料を基に、自己の考えをまとめる言語活動を引き続き重視していきたい。 来年度は、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができずか」の質問項目において、肯定的な回答の割合93%以上を目指す。(今年度90%)また、「授業で学んだことを、他の学習で生かしていますか」の質問項目において、教科等横断の視点を意識した本校独自の教育課程編成を計画実践し、肯定的な回答の割合92%以上を目指す。(今年度89.6%)

① 今年度の課題と学力向上策		
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 国語の漢字を正しく使うこと、算数「乗法と除法」の計算の定着に課題がある。 <指導上の課題> 児童が自らの学びを振り返る時間を確保するための授業マネジメント力の向上。	⇒ 「ドリルパーク」や「スタディサプリ」等を活用し、漢字や基本的な計算等の反復・習熟に取り組む。【毎日の宿題や授業開始時の実施】 授業中に児童が学びを振り返る時間を設定し、次の学びに生かせるようにする。【毎時間設定】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 自分の考えを論理的に説明することに対して苦手意識がある。 <指導上の課題> 子ども主体の学びとなるよう本校の育てたい資質能力につながる授業実践。	⇒ 他者との協働を通じて自分の考えを比較、検討する場面を多く設定するなどの実践を取り入れていく。また、児童の目的意識を醸成し学習の進め方を選択、決定させる学習を多く取り入れていく。【単元を通して計画的に実施】

⑤ 学力向上策の実施状況		
知識・技能	B	「ドリルパーク」や「スタディサプリ」等を児童の定着状況に応じて活用し、基礎基本の定着を進めたことで、R7さいたま市学習状況調査「算数」「社会」「理科」のいずれにおいても各学年のさいたま市の平均を上回る結果となった。 課題やまとめ(振り返り)を自ら考えさせる活動を目的意識をもたせ、年間を通じて行ったことで基礎が定着してきた。R7年度さいたま市学習状況調査の国語5・6年において「言葉の特徴や使い方に関する事項」、算数4・6年において「数と計算に関する区分け」では、同集団比較においてR6年度の結果を上回った。
思考・判断・表現	B	R7さいたま市学習状況調査「国語」「算数」「社会」「理科」ともに各学年のさいたま市の平均を上回る結果となった。 教科ごとにした共同編集が有効にはたらく学習活動を単元中に位置付けることで、協働的な学びにつなげる素地をつくることができ、R7年度さいたま市学習状況調査の4・5年国語、5年算数、6年社会において「思考・判断・表現」では、同集団比較においてR6年度の結果を上回った。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

② 全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語は、昨年度の本校平均正答率と比較し、+8.1P向上した。理科の「電気の性質」において課題が見られた。身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物の区別が充分できていない。自然の事物・現象と知識を関連付けたり、知識を相互に関係付けたりできていないことが考えられる。 児童質問「課題の解決に向けて、自分で考え、自分からとりくんでいましたか」に対する肯定的な回答が93%を超えた。今後も全ての児童の主体性を引き出すことができるよう、教職員の研修を積み重ねていく。
思考・判断・表現	国語は、昨年度の本校平均正答率と比較し、+9P、算数は+2.7P向上した。算数科の「数と計算」において課題が見られた。「共通する単位分数を見出し、加数と被加数が共通する単位分数の幾つ分か」を数や言葉を用いて記述することが苦手である。 児童質問「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなど工夫して発表」や「次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができる」に対する肯定的な回答は高い傾向にある。これまでの手立てを引き続き実践するとともに、他教科等とつなげたり、日常生活と関連付けたりする授業を構想していく。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④ さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	全学年国語では、「正しい漢字に直す問題」において一部課題が見られた。今後は、漢字の意味を考えながら日常生活で意識しながら活用していく活動を大切にしていきたい。 算数「小数の減法・除法の計算」と「分数の減法の計算」を解く問題に課題がみられた。解答類型を見てみると、小数の除法の計算では、除数を被除数と同じ数をかけても商は変わらないという計算の性質を活用して考えられていないこと、分数の減法の計算では、通分してから計算をすることが理解できていないが、約分まで求められていないことが原因だと考えられる。
思考・判断・表現	国語では、目的や意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら自分の考えをまとめることに課題がみられた。今後は、自分の思いや考えを自分の言葉で表現できるような機会を意図的に単元計画上に設定していく。 生活習慣等に関する調査から児童がICT機器活用には自信をもっていることが分かったため、様々な表現方法やツールを活用して、今後も思考力・判断力・表現力等の向上に努めていく。

③ 中間期報告			
	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】	
知識・技能	B	「ドリルパーク」や「スタディサプリ」等を児童の定着状況に応じて活用し、基礎学力の向上を進めた。例えば、国語では、単元ははじめに立てた目標と照らし合わせて振り返りをする中で、自己の課題を明確にし、次時に生かそうとする児童が増えてきた。算数では、スクリーンショットやExcel(共同編集)等、振り返りから知識を繋ぐ実践を積み重ねつつある。	変更なし
思考・判断・表現	B	自分の考えをもち、他者との意見を比較検討する活動を、児童の実態を見極めながら継続して行った。例えば、理科では、課題から実験方法を個人、ペア、3人組と児童に選択できる環境を整備し、各自検討し、安全性を教員と確認後、実際に実験することを継続して行った。その結果、説得力のある考察を個々で出し合い、多面的・多角的に比較する活動ができ、深い学びにつながっている。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)